
水～スイ～

井沢あや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水~スイ~

【Zコード】

Z2312A

【作者名】

井沢あや

【あらすじ】

高校生の竹野には校内に気になる少女がいて、思いきって彼女に近付いて行く。名前も知らない彼女との、淡い青春恋物語。

(前書き)

うだるまいに暑こ夏の田は、水に浮かびたくなるんです。

私は水の一部となり、ちいさなそれの中を漂う。そんな時間を愛しているんです。

水うスイ

ゆらり、ゆらり。

誰もいないプールを私は漂う。

学校の屋外プールには私以外に全く人がいない。愛すべき私の時間。誰もいないプールで声だし。

鼻唄がもの悲しく響いた。それでも私は流行りの「・POPナンバー」を歌い続ける。

サビに入つてのつてきた私は、ゆつたりと背泳ぎなんて始めた。そのときだつた。視線を感じたのは、

歌うのを中断して、辺りを見渡す。

誰もいない。アリと蝶々が少し舞つているだけ。

私は背泳ぎを再開した。

また、視線を感じる。

再び、背泳ぎ。

何度も繰り返した時、校舎の3階にその視線の主を見つけた。

男とも女とも知れない何者かと、ジットリと視線が絡まる。

先に目を反らしたのは奴の方だつた。

少し勝つたような心地がして、私はタプンと水につかる。

向こうから、私はどんな風に見えているのだろう。考えるとなぜかドキドキした。

出来れば神秘的で美しく映つていて。水に溶けこむマーメイドのように。

綺麗な尾鰭を揺らして優雅に漂う彼女たちのように、憧れを感じさ

せたいと思つ。

三階のそこは音楽室だつた。

しかし吹奏学部が常に使用している第一教室ではなく、誰もいない
第二教室。

「なあ、うちの学校つて水泳部とかあつたっけ？」

「ねえよ。なんで？」「人がいる……」

2人は放課後の空き教室でたわいもない雑談をしていくところだつた。

窓辺に立つてゐる華奢な美男子が竹野 光輝、ピアノ用の腰掛けに
あぐらをかいてゐるのが荒川 大和である。

竹野の言葉に、荒川は渋々といった表情で窓辺に歩み寄る。

「どこだよ」

「え？ だからプールに……」

竹野が再び見下ろした時、そこには既に人影は見当たらなかつた。

「お前オバケでも見たんだろ、きつと」

荒川は茶化す様にそいつた。

晴れないモヤモヤを抱えたまま、この口竹野は家路についた。

翌日。

竹野は授業に集中出来ぬまま、ぼおつと昨日の出来事を反芻してい
た。

何度も考へても見間違ひなどではない。確かにほつきりと少女の姿を
見たのだ。

「ああ〜くそつ……」

竹野はまともまつてくれない自分の思考を留めるように机を殴つた。

……授業中であるということをすつかり忘れて。

「竹野！ なんだその態度は！ 僕の授業が気に入らないなら出て行け

……」

当然の如く先生は「立腹。

竹野は言われるままに立ち上がり、教室の外へと出ていった。途中、隣の席の荒川がドンマイといった表情を向けていたのを横目で確認しながら。

この時の竹野の心情はとくに、集中出来ない授業を受けていてもしようがないと腹をくくっていた。

竹野の頭は、昨日の少女の事でいっぱいだった。深い恋に墮ちたかのように。廊下に座り込みながら、竹野は放課後プールに行けば少女に会えるかもしれない、小さな期待を膨らませていたのだった。

バタバタと階段を駆け降りる音、互いに挨拶を交す声、運動部の元気な掛け声。

放課後の静かな教室にそれらが仄かに届いてくる。

どこか寂しいその空間に、竹野はひとり残っていた。

「もうそろそろ行くかな……」

竹野が独り言を呟く。もちろん田井は少女に再び会つ、いや再び見る事である。ゆっくりと手摺を撫でながら階段を降りて行く。一步、また一步と進む度、緊張が増すのを竹野は感じていた。

「多分、いないよな」

竹野はとうとうプールに続くドアの前に立つた。

コホンと咳払いをして自分を勇めてから、竹野はそつとドアを開いた。柔らかな光が溢れる。

そこには、豊かに水をたたえるプールが在るだけであった。

「なんだよ。やつぱりなあ～」

竹野は安堵の表情を浮かべた。プールの淵まで歩いて行き、昨日少女がいた辺りを眺める。

当然なんの痕跡も残つていないので、竹野は少しドキドキした。

「あ～あ……バカらし。早く帰ろ～」

竹野が出入り口に向き直ろうとしたその時、誰かが竹野の背中を押した。

「うわっ……！」

何とか体制を立て直そうとする行為も虚しく、竹野はプールに思いきり飛込んでしまった。

物凄い水音と水しぶきが辺りに飛び散る。

「何なんだよ！！」

勢いよく叫んだ竹野だったが、そこにいる人物を見て面食らった。どうせ悪友たちの一人だろうと思っていたのに、そこにいたのは…

…美しく微笑する水着姿の少女だった。

「昨日見てたのも、君でしょう？」

彼女はニコリと笑みを溢す。

近くで見ると、上から見ていた時とは比べ物にならない位美しかった。

「……ごめん。なさい」

息が詰まる程の高揚感。竹野は眩に似たものを感じた。

初めて聞く声は甘過ぎないソプラノで、竹野の耳を喜ばせた。

初めて覗き込んだ瞳は、淡い褐色で憂いを含んでいた。

束ねられた長い髪を下ろせば、きっと指通りがよくサラサラしているのだろう。竹野は彼女の全てに陶酔した。

「大丈夫？ もしかして痛かった？」

しかし彼女の言葉で竹野は現実に引き戻された。

ぼーっとして動かない竹野を彼女は心配そうに見つめていた。

みとれていたことを思い竹野は赤くなつた。

「大丈夫です。なんともないし……」

「ふふっ、良かつた」

彼女は竹野の横にゆっくりつかり、プールの壁を蹴つて泳いで行つた。本当に気持ち良さそうに。

真ん中辺りで立ち止まると、彼女は竹野を振り返つた。

「君もおいでよー！」

竹野は重くなつた上着を脱ぎ捨て彼女の処まで泳いでいった。

彼女のように優雅には進めなかつたけれど。

「何秒潜つてられるか対決しよ」

「え？ 対決つて……」

顔に似合わず幼い事を言つ彼女。
それすら竹野の目には甘美に映つた。

「よ～い、ドン！」

一斉に水中に潜つた。竹野が目を開くと悪戯に微笑む彼女がいた。
彼女が竹野の手をとる。全神経がそこに集中して、熱くなる。
またも息苦しさに襲われ、竹野は息を大きく吐き出してしまつた。
水面からザバツと顔を出す。

続いて彼女も。

「本当に大丈夫？なんか顔赤いけど……」

彼女に指摘されて益々竹野の顔は熱つた。不意に彼女の顔が近付
き、竹野の額にコツリと当たつた。

「ん、熱はないみたい」

竹野は耐えきれず、彼女を水中へ押し戻した。若かつたのだ。
目と目を合わせると、彼女は酷く狼狽しているように見えた。
竹野は彼女の背にそつと手を回し、触れたか分からぬ程優しくキ
スを落とした。

彼女の方も竹野を見つめ、躊躇いがちに腕を回した。
どちらともなく、2人は深くキスをした。水中で、ワルツを踊つて
いるように舞いながら、ゆらり、ゆらりと。
誰もいないその場所で、一人だけの秘密の舞踏会。

最後に彼女が言つた。

「さよなら……」

涙を、溢しながら。

後になつて知つた。

彼女があの翌日に転校していつた事、彼女が魚住 ハルカという名
前だつて事。

事実を知つた竹野は落胆し、しばらくは立ち直れずについた。
交したキスを思い出しては、夢だったのではと考えてしまつ。

今でも、竹野はハルカの夢を見る。

結婚し一児の父となつた今でも、細胞の何%かは彼女に恋をしていた。

「僕は人魚に恋をしたんですね」

竹野はそう語つてくれた。

彼の脳裏にはハルカとの至福のワルツが、しつかりと刻み込まれて
いることだらけ……。

～END～

(後書き)

よろしければ評価の方お願い致します

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2312a/>

水～スイ～

2011年1月25日15時05分発行